

## 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.38)

### 「そこのけそこのけ BUS 様通る」

・・・発車オーライ・・・

私は、ボランティア活動という支出面の制約から、日常生活に不可欠な自家用車という、文明の利器を当地では所有しておらず、通勤をはじめとして移動には、必然的にマイカー以外の代替交通手段を使わざるを得ない。

そのうちの1つに、メキシコ市内の多くの地域を走っており、使いこなせれば便利だが、地理に不案内の者にとっては、少々利用しにくい乗り物に、「ペセロ」と言う乗り合いのバスがある。

「ペセロ」とは、かつて運賃が1ペソだった時代の名残りで、現在は値上がりして1ペソではなくなっても、人によっては今でもこのように呼んでおり、現在の値段は距離、バスの大きさなどによって、3.0～5.0 ペソ(=約33～55 円)の値段である。

大半はマイクロバスの車両が使われていて、外観も車内もあまり綺麗でないものが多く、座席も椅子式があったり、ベンチスタイルであったり、運転手により、CD やラジオを大きな音でかけていたりして、何一つとして同じものは見当たらない。これに乗ると、昭和30年代に流行った歌が思い浮かぶ。

田舎のバスは おんぼろ車

タイヤはつぎだらけ 窓は閉まらない

それでもお客さん 我慢をしているよ

それは私が 美人だから (第一節 以下略)

「田舎のバス」(三木鶏郎作詞・作曲、中村メイコ歌)

美人のバスガイドも居ないワンマンバスで、ドアは開けっ放しが多いものの、車体もここまではひどくないが、その類似性に思わず目元が綻んでくる。

このペセロには、路線図も時刻表も存在しない。そのバスが通る経路を、主要な大通りなどの名前で示して、「地下鉄〇〇駅」とか、「××通り」などと行き先の書かれた小さなプレートが、フロントガラスに貼られているので、乗る為には、近づいて来るバスの行き先表示を、瞬時に読みこむ動体視力能力と、ある程度の位置関係が、頭の中で把握されていることが前提である。さらに、事実上停留所がない。

本当は辻ごとの手前の角が、停留所と定められているようだが、殆ど守られていない。乗客をたくさん乗せれば、運転手の稼ぎは多くなるので、彼らは出来るだけ多く客を乗せようとし、その結果、停留所でなくてもどこでも止まるということになり、乗客もその方が便利という、双方の暗黙の了解があるのだろう。

田舎のバスは 便利なバスよ

どこでも乗せる どこでもおろす (同上、以下 第3節省略)

益々似て楽しくなってくるのではないか。日々のシーンを再現しよう。

「このバスは、〇〇〇を通る？」 ボラッチョ・ボニート氏、多分目的方面へ行くだらうと思われるバスを、手を挙げて止め、運転手に尋ねる。運転手返事せず、無愛想に黙ってうなずく。乗る前からの緊張で、手の内に



ペセロの車内の一例

汗を滲ませながら老妻の分と合わせて、前の搭乗口から乗って10ペソ硬貨を差し出す。

運転手受け取るや否や、すぐに走り出す。ボラッチョ氏よろめきながら、渡された4ペソのつり銭を受け取り、数を確認する。

「合っている。このスピードで片手運転しながら小銭を計算し、客に渡すなんて神業だ！」(ボラッチョ氏は彼の乱暴運転振りを黙認して、妙なところを感心し、意識して日本語で呟く)

「おととと」(急激なカーブ切り運転でまたよろめく)、「おやまあ〜」(老妻思わず呟く)

(車内の客、見慣れない外国人が乗っているの、ジロジロと好奇の目で眺めている)

「おととと、おととと」(急停車で再びよろめく) (座っている客でさえ、必死に何かに掴っている)

「うむ！このゆれる車内で化粧したり、食べ物を食べたりする人もおり、バイタリティ溢れているなあ！」(ボラッチョ氏、感心して車内を見渡し、声なき声を発する) (老妻注意の意味でボラッチョ氏の横腹を肘で突く)

「おや！目的のところで止まってくれない。ちえ！」(思わず舌打ちする) (感心している場合ではなかった)

「貴方がコールしないからですよ」(老妻一言文句を言う)、

「やっと止まった。仕方がないここで降りるか」(後ろの降車口から降りて本来の目的地へ向かって、二人ともとぼとぼと無言で歩き出す)。横を後続の車が猛烈に排気ガスを出し、警笛で威嚇しながら高速で通過していく。太陽は燦燦と輝き、汗ばんでくる。

小林一茶の、「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」の句をパロディ化して、「車どもそこのけそこのけブスさま通る」とタイトルに因んで作ってみたが、可愛さも風情も何も無い、無い無い尽くしの駄句である。

さらに弁解するとブスは、容姿のことでなく、タイトルのようにBUS (autobús アウトブス)の省略形で「バス」である。もっと余分に付け加えると、バスには「ómnibus」(オムニブス)という単語もあり、こちらの方が「鬼バス」とも聞こえ、この種のバスをあらわしていると感じませんか？

通勤でも使っているが、私のように背広姿で乗っているのは殆どおらず、言葉を変えて言えば、庶民の生活実感が実地に体験でき、庶民生活の匂いが直に伝わってくると言えよう。

満員状態が多く、スリなどへの不安感が頭の中を過ぎる中で(実際被害に会った人もいる)、随時実施されてきた、我々に対する滞在手当の減額の一つの理由とされる、「ボランティアとして、派遣国における一般人の目線で仕事をしなさい」という、高尚なる？論理を受けざるを得ない現実と、一方では常日頃言われている、「人ごみのあるところへは出来るだけ近寄らないよう、安全に注意すること」という、安全管理者側の話と、どのように整合させていくかを考えながら、ボランティア活動に携わっている者にとって、家族を含めてこの種の交通手段を使わざるを得ない状況は、仕方がないのかな〜?と、半ば諦めながらも使用している。

毎日の通勤の場合は、家に帰れば緊張感と疲労感から解放され、楽しい食事と冷えたビールとテキーラが待っているという、思いを込めながら。(2010年5月12日)

